

感情動詞オソルのヲ/ニ格選択について

— 中世和漢混交文を中心に —

松野美海

1. はじめに

現代語オソレルはヲ/ニ格を共にとる動詞であり(1)、中世末期でもロドリゲス『日本大文典』で「Ni(に)のつく与格か Vo(を)のつく対格かを要求する中性動詞」(p.381)にオソルル(Vosoruru)が挙げられる。

(1) a. 太郎は事業の失敗を恐れて、何もできなかった。

b. 太郎は花子の剣幕に恐れて、何もできなかった。

現代語の感情動詞にはほかにもヲ/ニ格の両者を取り得るものがあり、このような感情動詞のヲ/ニの対立に関して、例えばヲ格名詞が対象、ニ格名詞が原因を表すとする論考がある(佐藤1997など)。しかし(1ab)のオソレルではヲ格が対象、ニ格が原因という対立は必ずしも該当せず、タヨルなど、ほかにも対象/原因の対立で捉えにくい感情動詞が存在する。ヲ/ニをとる場合のそれぞれの差異は、先行論で指摘される意志性(工藤1978)や持続的/一時的(益岡・田窪1987)などでもすべては捉えきれないようである。現代語オソレルに関して、ヲ/ニの違いという観点から記述した論考は見当たらない。現代語においてはヲ格例が多いのに対しニ格例が豊富ではなく、ヲ/ニの差が見えにくいこともその一因であろう。しかし歴史的にみると、現代語ほどの偏りなくヲ/ニが用いられており、歴史的な考察を行うことで、現代語の様相を説明するための示唆が得られる可能性がある。また感情動詞以外にも「背く」(信太1981)など格形式が現代語と異なる動詞の存在が知られる。動詞の意味や格形式の機能の変遷を考慮に入れ、現代語を変遷の末の様相として見ることで、新たな知見が得られる可能性がある。

そこで本稿ではその一段階として史的共時態の様相を見るため、中世和漢混交文のオソルを中心に上げ、オソルがとる名詞の格形式による差異を示すことで、ヲ/ニの機能的対立を明らかにする。さらに現代語の様相への大まかな流れを記述し、オソレルの格形式選択要因の手がかりを求める。

2. 先行研究と問題の所在

ヲ/ニの機能については多くの研究の蓄積があるが、格形式の史的変遷や共時のヲ/ニ交替現象の問題に関しては、十分に解明されているとは言えない。現代語の感情動詞に関しては、寺村(1982)、益岡・田窪(1987)などが、一時的な感情と二格、能動的な(また持続的な(益岡・田窪1987))、感情とヲ格の関係を指摘する。しかし感情動詞の多くは能動性の判断が困難であり、(1ab)のように動詞によって持続性/一時性の差が明確でないものもある。個別の動詞の格形式に関して、史的変遷に言及した研究に「好く」「恋ふ」などに関する宮地^(注1)(1979)、「背く」に関する信太(1981)などがある。両者は語義の変遷と関係づけて論じ、信太(1981)ではヲ/ニの機能の変化も要因とするものの、一般化には至っておらず、個別の語の研究の蓄積が必要である。

そこでその端緒として本稿では、ヲ/ニ両格形式をとり、史的変遷の把握が可能なオソルを取り上げ、中世語での格形式対立の様相を考察する。オソルの格形式を考察する先行論としては田中(1990)(1995ab)がある。従来オソルについては活用の変遷や和文語とされるオツとの対照の観点から論じられたが、田中(1990)は格形式にも注目し、平安・鎌倉時代のオソルとオツを対照して、～ヲオソルの場合は抽象性が高い事物や他者の領域の事柄が多く、二格の場合は具体物が多いとする。しかし一方で4節で述べるように、ヲでもニでも表わされる名詞は少なくなく、田中(1990)のいう具体性/抽象性では捉えきれず、補語名詞の更なる検討の余地がある。さらに田中(1995b)では『今昔物語集』におけるオソルとオソロシを調査し、オソルがとる二格名詞は眼前の存在であり、ヲ格をとる場合は「意識の中で対象化されているもの」(p.58)とする。またオソロシが準体句をとるのに対し、オソルは「事」をとることが一般的で、準体句をとる場合は二格になるとする。本稿ではこの指摘が中世に広く当てはまるか否かを確認し、より詳細に補語名詞の内実を検討する。

3、4節の調査範囲は、オソルの史的展開を把握するにあたり、①オソルの用例がある程度まとまって見られたのが院政期以降であること、②和漢混交文にオソルが現れやすく、訓点資料、和文資料と比較して現れ方が多様なことから中世和漢混交文とする。オヂオソル、オソレナゲクなど感情・思考動詞と共起する例は調査対象から除いた。またその考察結果を基に現代までの大まかな変遷の様相を確認する。

3. 中世和漢混交文のオソル概観

本節では中世和漢混交文におけるオソルを概観する。オソルはヲ/ニの両者をとり得、同じ名詞をとる例も存する(2)(3)。

(2) みさごは荒磯に居る。すなはち、人をおそるゝがゆゑなり。

(注4)
(方丈記 p.41)

(3) (略)すなはち人をつかはしてみせられければ、狐一疋來て供物等をくひけり。さらに人におそるゝ事なし。(古今著聞集二六五 p.214)

ここで各資料においてオソルが一文中にヲ/ニ/無助詞の対象/トと共に起する用例数を表1に示す。「左記以外」は上記4種以外の用例で、感情主のみを伴う例(4)や連体修飾の例(5)を含む。

(4) (略)燈籠の火のやうなる物の、おとゞの御身より出て、ばと消るが如くして失にけり。人あまたみ奉りけれ共、恐れて是を申さず。

(平家物語三 p.241)

(5) 病者、かしらをそらで年月を送りたるあひだ、ひげ、かみ、銀の針をたてたるやうにて、鬼のごとし。されども、此女、おそるゝけしきなくして、いふやう (略)

(宇治拾遺物語六〇 p.167)

資料全体では「左記

【表1】中世和漢混交文におけるオソルの用例数

以外」が56.6%で過半数を占め、ヲ/ニ格名詞やトを伴わない形が基本と考えられる。これらの例は見聞きしたことが前文脈にあり、それを受けての感情の描写例や、感情主を想定しにくい一般論の例が見られる。前者の場合、感情主が前文脈ま

	ヲ	無助詞 対象有	ニ	ト	左記 以外	総数	ヲ格割合	左記以外 割合
大鏡	1	0	0	2	3	6	16.7%	50.0%
今昔物語集	29	1	10	2	114	156	18.6%	73.1%
寶物集	0	0	3	0	0	3	0.0%	0.0%
沙石集	22	2	2	0	24	50	44.0%	48.0%
方丈記	1	0	0	0	1	2	50.0%	50.0%
海道記	0	0	2	0	0	2	0.0%	0.0%
宇治拾遺物語	3	0	0	0	5	8	37.5%	62.5%
十訓抄	2	0	1	0	2	5	40.0%	40.0%
古今著聞集	2	0	2	0	12	16	12.5%	75.0%
歎異抄	2	0	0	0	1	3	66.7%	33.3%
保元物語	3	0	3	0	1	7	42.9%	14.3%
平治物語	0	0	2	1(トテ)	4	7	0.0%	57.1%
覚一本平家物語	6	0	14	0	14	34	17.6%	41.2%
太平記	28	1	14	2	26	71	39.4%	36.6%
義経記	1	1	1	0	5	8	12.5%	62.5%
曾我物語	3	1	3	0	14	21	14.3%	66.7%
計	103	6	57	7	226	399	25.8%	56.6%

たは一文中に表示される場合がある。見聞きしたことが明示される例は多く見られ、ある状況を受けて抱く感情を描写する点で、ニやトが共起する例に類する。

ヲ/ニ共起例について、どちらが優勢かには資料によって差があり、全体的にはヲ格が優勢な一方で、ニ格例のみの資料も存在する。これは文体によると言うよりも、オソルが文脈に応じてどちらの格形式も要求し得ることを示すと考えられる。次節では両格形式のとり名詞のタイプ別に考察を行う。オソルはデキゴトを明示的に表すことができる名詞節をとり得、特に名詞の意味特性を検討する際には、項名詞が節をなす場合と節以外の名詞の場合をわけて考察することが有益だろう。なおオソルの性質、オソルのとり格の機能を分析するためには全用例を考察すべきだが、本稿ではヲ/ニ格の選択要因を明らかにすることを目的とするため、ヲ/ニ以外については適宜触れる程度に留める。

4. ヲ/ニ格名詞の意味特性

4.1 節をなす場合

まず「城を出給ふ事」のようなヲ格項名詞が節をなす例に注目する。ヲ格例103例中22例（約21.4%）が節をなす例であり、ヲ格例の中では高い割合を示すわけではないが、構文に特徴がある。ヲ格例における被修飾名詞(N)の上接要素を表2に示す。約三分の二の14例がム、ウズを伴い、Nは1例を除き全て「コト」である。^(注7) (6)~(11)に〜コトヲの例を示す。

【表2】節+ヲ格例におけるNの上接要素

	ム	ウ(/ン)ズ	動詞連体形	リ/タリ
用例数	12	2	6	2
比率(%)	54.5	9.1	27.3	9.1

(6) 潘果、里ノ年少輩ト共ニ、此ノ羊ヲ取テ窃ニ家ニ将帰ラムト為ルニ、其ノ羊路中ニシテ鳴ク。潘果、羊ノ音ヲ人ノ聞カム事ヲ懼レテ、忽ニ其ノ羊ノ舌ヲ抜き捨ツ。
(今昔物語集九—二十三 p.218)

(7) 前々モ、此様ニシテ此ニ来ヌル人ヲバ、返テ此ノ有様ヲ語ラム事ヲ怖レテ、必殺ス也。
(今昔物語集三十一—十三 p.468)

(8) 徐福・文成その偽りの表れて、責めの我が身に來たらんずる事を恐れて、
「これは何様龍神の祟りを成すと覚え候ふ。(後略) (太平記二十六-1183)

ムの意味・機能に関しては推量、設想、非現実など諸説見られるが、いずれもムを伴って表されるのは実現していない事態だという点は共通する。これらの例では

一様に、ム/ウ(ン)ズル+コトによって表される未実現の事態が実現することを恐怖に感じている。動詞(否定1例含む)+コトの例も、6例とも未実現の事態を表す。(9)(10)は前文脈で明示され、(11)でも「口の虎が身を害し舌の鉤が命をたつ」事態が起こらないよう、「言ヲイタサス」という行動をとる。

(9) 「南ノ門ヲ出給ニ、道ニ病人ヲ見テ此レヲ問聞給テ弥ヨ不楽給ハズ」。王此ノ事ヲ聞給テ大ニ歎キ給テ、今ヨリハ城ヲ出給フ事ヲ恐レ給テ、弥ヨ噉メ給フ。
(今昔物語集一—三 p.12)

(10) 我レ、後ニ来ラムニハ、師ノ不見給ザル事ヲ恐ル。願クハ此ニ住シ給ヘ」ト請フ。
(今昔物語集七—四十八 p.172)

(11) 口ノ虎身ヲ害シ舌ノ鉤命ヲタツ事ヲオソレテミタリニ言ヲイタサス不妄語戒ニアタル。
(沙石集三 134左)

(12) 太政入道、瀬尾太郎兼康に仰て、備中國へぞ下されける。兼康は宰相のかへり聞給はん所をおそれて、道すがらもやう／＼にいたはりなぐさめ奉る。
(稿者注：宰相は少将の助命を嘆願していたが、叶わないことが判明した。)
(平家物語二 p.184)

(12)は唯一コト節ではない例だが、これも「宰相が(少将が助命されないことを)耳になさる」という事態は未実現である。リ/タリを伴う例も存在するものの2例と少なく、いずれも『今昔物語集』に見られる。

(13) (稿者注：この現報譚を)聞ク人、且ハ現報ヲ感ゼル事ヲ怖レ、且ハ善根ノ新タナル事ヲ貴ブ。
(今昔物語集九—二十三 p.219)

(14) 其ノ史、遅参シタル事ヲ怖レテ、忽ギ参ケルニ、中ノ御門ノ門ニ、弁ノ車ノ立タリケルヲ見テ、弁ハ参ニケリト云フ事ヲ知テ、官ニ忽ギ参ルニ(略)
(今昔物語集二十七—九 p.103)

(13)は現報譚を聞いた人々の反応である。「報いを受ける」という事態は自分の身に起こったことではないため、把握の確からしさは弱いと考えられ、確定性が低いと言える。(14)に関して、岡崎(1973)によると、院政鎌倉時代の「遅参」は原則として「参上するはずの時刻になつても参上しないこと」(p.259)の意を表し、「参上するはずの時刻に遅れて参上すること。」(p.264)の意を表すのは極めて例外的だとする。(14)の「遅参す」も「忽ギ参ケルニ」とあることから、まだ政庁に到着しておらず、「定刻に参上していない」状態である。したがってヲ格上接事態は未実現では

ないが、「遅れて参上した」という既実現事態でもない。ここで注目すべきなのは、ヲ格名詞がいずれも補文節をなし、デキゴトを表すという点である。さらにデキゴトはほぼ未実現事態で、確定的な把握ができない事態と言える。

一方二格名詞では、節をなす例は57例中2例にすぎず、場所として解釈される1例、接続助詞とされ得る2例を項名詞と解釈する可能性を考慮しても5例のみである。節を構成する類は10%に満たず(約8.8%)、さらにモノ・ヒトを表す関係節、またはデキゴトとモノの二様に解釈できる準体節しか見られない。接続助詞と解釈できる(19)を加えた全5例を示す。

(15) (略)すなはち御旗を引き奪ひて取り、あまつさへ旗持ちたる芋瀬が下人の大の男を掴みて、四、五丈ばかりぞ投げたりける。その怪力、比類無きにや恐れたりけん、芋瀬庄司、一言の返事もせざりければ、村上、自ら御旗を肩に懸けて、程無く宮に追つ着き奉る。(太平記五-548)

(16) 然レバ、公事ト云乍ラ、然様二人離レタラム所ニハ可怖キ事也。
(今昔物語集二十七-九 p.104)

(17) 篠村の大勢、これを聞きて、寄せられやせんずらんと、二日路を隔てたる敵に恐れて一足も先へは進まず、(略) (太平記三十八-202)

(18) (略)羊、獅子の怒れる形に恐れて忽ちに地に倒る。(太平記三十八-836)

(19) 「あなおそろし。入道のあれ程いかり給へるに、ちとも恐れず、返事うちしてたゝるゝ事よ」とて、法印をほめぬ人こそなかりけれ。
(平家物語三 p.254)

(15)はモノを表す「比類無い怪力」、または状態を表す「比類無いこと」のどちらの解釈も許す。(16)は場所格として「～所において」と解釈する注釈もあるが、感情の対象と解釈しても、当該名詞は場所を指し、モノに分類される。(17)(18)はいずれもデキゴトではなくヒト・モノを表し、また(19)は格助詞と捉えてヒトである「お怒りになっている入道」とも解釈できる。いずれも目の前の状況と密接に結びついている。敵が道のり二日分離れているにも関わらず恐怖を抱いている(17)でも、物理的に離れていたとしても「一足も先へは進まない」程、眼前の敵と同様に確定的なものとして把握していると言える。

ヲ/二格名詞が節をなす場合、二格ではデキゴトはとりにくく、モノをとると言え、関係節である。対照的にヲ格ではデキゴトを表し、形式名詞(主にコト)を主名

詞とする補文関係にある。

4.2 確定性

4.1節を踏まえると、オソルのヲ/ニ格名詞が節をなす場合、ヲ格は非確定的な事態を、ニ格は確定的な事態をとると考えられる。すなわち両格形式は、確定性において対立していると見ることができる。本稿で言う「確定的である」とは、感情を抱く時点において対象が眼前にある、または感情主がそのように捉えているということを言う。確定的である場合の典型は、対象が視覚を含めた知覚によって把握されている場合である。現実世界に出来た事物とすることができるが、既実現の事態で眼前にない場合も含むこと、また感情主が眼前にあると見なす場合も含むことから、「確定性」とする。一般的知識、直接知覚していないモノなどになると確定性の程度は漸次低くなる。一般的な知識は、現実の世界の事態の積み重ねによって構成されることが多い。しかし知識は実際の時間軸上に位置づけられない。真理も同様で、時間軸上に位置づけられない点で既実現事態と異なる。つまり事態を時間軸上に位置づけられるか否かという観点から捉えた時、過去や現在において成立したものを確定的とし、未来時に位置づけられるもの、または時間軸上に位置づけられない事態を確定的ではないとする。非確定的である場合の典型は、対象が現実世界になく観念上のみで構成される場合である。未実現の事態はこれにあたる。

感情動詞が心の動きに重きを置く表現だとすると、現在又は過去の事態に対する感情を基本とするのが自然だろう。確定性は「眼前性」を内包し、眼前にあるとは言えない既実現事態も含む点で、田中(1995b)の「眼前性」とニ格が関係するとの指摘を発展させたものと言える。確定性という観点は項名詞が節をなす場合のみならず、オソルにおけるヲ/ニ格例の差異を統一的に説明できると考える。

4.3 節以外の名詞の場合

次に節をなす場合以外の例を検討する。ヲ格例(A)の名詞は未だ直面していない事物、もしくは名詞そのものではなく名詞によって引き起こされる事態を表す。(A)以外のものをヲ格例(B)に分類した。

ヲ：(A)後世、後世ノ事、悪道、悪業、悪趣、悪、過、罪障、業報、妄念、執心、因果ノ道理、信施、呵責、殺生、多生ノ苦、危亡、鞭、片方の憤り、上

の御咎め、趙高が讒、風雨の難、三族の刑、毛ノ色、皇化

(36/81^(註9)=44.4%)

(B)鬼神ナント、仏神、彼ノ女、勅命、その間、権門勢家の正税・官物、我
とが、権、冥見の瞬、官法、秦の兵、敵、軌、名 (14/81=17.3%)

ニ：此ノ音、風、龍顔、海賊、我、我等、主、中宮、梶原、木曾義仲とかや、
此御詞、軍、矢、太刀、仏法、害心、この夢、天、仏天、聞(きき)、秋、
この勢、綱が勢ひ、権門、王位、王ノ仰セ、宣旨院旨 (32/52=61.5%)

(20)「後世」は生まれ変わった後の生涯を指し、(21)「上の御咎め」は「いかなる御沙汰にか会ひ候はんずらん」とあるように「上に咎められるだろうこと」、(22)「執心」は「執着する心をもつこと」を表す。その他も同様に未だ直面していないモノや未実現の事態を表す。

(20) 其ノ後、偏ニ後世ヲ恐レテ、弥陀ノ念仏ヲ唱ヘテ、極楽ニ往生セムト願フ。
(今昔物語集十五—三十三 p.430)

(21) これも咎ありし人の行方なれば、いかなる御沙汰にか会ひ候はんずらんと
上の御咎めを恐れて、隠し待るにこそと思し召さるる事も候ひぬべけれ。
(太平記十三-585)

(22) 我相ヲノソキ執心ヲオソレテ名利ヲ思ハス才覚ヲモトメシテサシアタリ
タル執着妄念ノトカヲ覚知シテノソクヘキナリ (沙石集四184右)

これらは既実現事態や眼前のモノ・ヒトとは対照的に、対象把握の確定性が低い。
(23)(24)のようにヲ格名詞「鞭」「毛の色」によって引き起こされる事態(=鞭で叩かれること、毛を求める人の手にかかること)に恐怖を感じる例も存在する。これらも未実現の事態である。

(23) それ穀尽きぬれば民窮し、民窮しぬれば年貢を備ふる事無し。疲馬の鞭を
恐れざるがごとし、皇化をも恐れず、利潤を先として常に非法を行ふ。
(太平記三十五-396)

(24) (稿者注：珍しい毛色の鹿が人里から隠れていたわけを聞かれて)鹿大王ノ
御輿ノ前ニ跪テ申サク、「我レ毛ノ色ヲ恐ル、ニ依テ、年来深キ山ニ隠レ
タリ。(今昔物語集五—十八 p.441)

(25) 佛在世ニ舍利弗目連廣野城トイフ國ヲスクルニソノ國ノ人ニケカクレケリ
鬼神ナントヲオソル、カコトシ (沙石集七324左)

- ㉔ 「都にて軍をせざりつるは敵を恐るるにはあらず、ただ將軍にところを置き奉る故なり。 (太平記三十九-594)

さて、名詞＋ヲ格例の半数近くが(A)に分類されるのに対し、(B)に示したように、未実現の事態や未だ直面していないモノとは捉えられない例も15例存在する㉔㉕。しかしその内実は㉔のように、描写されている場面において実際に鬼神に対して恐怖の感情を抱くという個別的事象があるのではなく、「人が鬼神に恐怖する」というような個別的な場面から離れた事象として言及する例が多くを占める。㉕のような個別的事象や、ヲ格名詞が実見されたものである例は2例に過ぎない。確定性が高い場合の典型が眼前のモノが感情の対象である場合だとすると、直接的な把握に依らない名詞は、把握の確定性が低い。

一方二格には実見されている「矢」「太刀」のような例が多く見られる。また㉖では「軍にまけておつるきに～」からわかるように既に起こった「軍(いくさ)」であり、^(注10)未実現の事態に比して確定性が高い。㉗は現実には矢が放たれるという事態は未実現だが、具体的な状況を設定し、その状況下で感情主が実際に目にするを前提とした発言である。典型例ではないが、確定性は高いと見てよいだろう。

- ㉖ 「(略)軍にまけておつるきに、いかばかりのことをかおもふらん。害してかへれ。」と宣へば、鞭をあげて六條堀河の宿所にはせきたり、みれば、軍(いくさ)におそれて人一人もなかりけり。 (平治物語 p.238)

- ㉗ 御こしに矢をまいらすべし。是為朝がはなつ矢にて候まし。天照太神・正八幡宮のはなたせ給ふ御矢也。駕輿丁矢におそれて御こしを打捨てたまつりにげちなむ。 (保元物語 p.84)

また二格名詞には㉘「木曾義仲」のような、ヲ格名詞には見られない固有名詞の例も存在する。精査したところ固有名詞の例はいずれも個別事象の描写であり、確定性が高いと考えられる。

- ㉘ それに壽永の秋のはじめ、木曾義仲とかやにおそれて、一門の人々住なれし都をば雲井のよそに顧て、(略) (平家物語灌頂巻 p.436)

二格に1例のみ未実現の事態をとる例㉙があるが、現段階では例外として判断を保留する。

- ㉙ 敵王きゝ、この者、身をすて、面をよごし、はれにつかふべき臣下にあらず、さりながら、世かはり、時うつれば、さもやと思ひ、かたわらにゆる

しおくとはいへども、なを害心におそれて、ゆるす心なかりけり。

(曾我物語 p.73)

ヲ格例は、名詞が未実現の事態や未来時に直面する可能性のあるモノか、或いは個別事象の描写ではない例が大半である。二格例は名詞が眼前のモノであるか、個別的事象を描写する例でほぼ占められる。二格例はほぼ確定性が高く、ヲ格例は対象把握が非確定的なもの、確定性の低いものが多いと言える。それぞれに例外が見られるものの、この傾向は明らかである。

4.4 共通する名詞

さらにヲ/二格に共通して見られる名詞についても検討する。このような名詞には次のものがある。

【ヲ/二例に共通する名詞】^(註11)威・威勢/気色/罪 /人/世/(ヲ：御前、一人(=天皇)、二：^(註12)公) /代名詞(此レ・ソレ/此ノ事・かやうの事)^(註13)

ただし「威勢・威」と代名詞以外はヲ/二例のどちらかが孤例である。ここでは、「威・威勢」「罪」を検討する。「威・威勢」では13例中11例が二格であり、二格で受けるのが一般的だと考えられる。

① 「たとひいかなる天雷なりとも、皇威に恐れざらんや」とて、弓に矢を取り添へて向ひ給へば、五体すくみてうつ臥しに倒れにけり。

(太平記十二-525)

② 元弘元年八月二十七日、主上笠置へ臨幸成りて、本堂を皇居と成さる。始め一兩日の程は、武威に恐れて、参りつかうまつる人一人も無かりけるが、(略)

(太平記三-11)

③ 今その敗軍を集めてかの余衆を擁ふに、雷霆の威を恐れず、重ねて斧鉞の罪を待つ。

(太平記十七-756)

④ 「われかくしをきたる劔、たづね給ふべきにぞ、めさるらん。とりいだすまじければ、さだめてせめころされなんず。(略)」さて、鍛冶が子、二十一歳にして、母のおしへにしたがひ、かの劔ほりいだしてもちけり。されども、王威をおそれて、里へはいでず、山にかくれるたりける。

(曾我物語 p.171)

「威」には「自然に人を従わせるような勢い」「武力」の意がある。「武力」の意に近いほど、直接的な影響が及ぶ。二格例には③①③②のような武力の行使が伴う例があり、矢を放つという実際の行為③①、武力そのもの③②などいずれも二格名詞が直接把握できる。一方ヲ格例の③③③④は具体的な武力とも、比喩的な表現であって実質的でないとも考えられるものである。③③の「雷霆の威」は朝廷の軍を指すが、激しい雷に例えている。③④の「王威」は軍勢や武力ではなく、「王が何か(迫害行為を)すること」と考えられ、節をなす場合に確定性の低い事態を表すことと通じる。「気色」「人」「世」のほか、代名詞も、語により程度の差はあれ、ヲ/ニと確定性の有無が関連する傾向がある。ただし節の場合に比してヲ/ニの差は明らかとは言えない。

「罪」でも孤例の二格と共にヲ格例の大半が、犯すかもしれない(=未実現の)罪であるが③⑤、ヲ格に2例、既に犯した罪の例が見出される。③⑥の「其罪」が罪によってもたらされる苦果を指すと解釈すれば、未実現と言えるが、証拠となる文脈がないため、「犯してしまった罪」として扱う。

③⑤ (略)願クハ仏、哀ヲ垂給テ、我等ガ道ヲ捨テ家ニ返ラム罪ヲ許シ給ヘ」ト。

(略)今汝ヲ罪ヲ恐レテ家ニ返ラム事、彼ノ愚痴ノ人ノ如キ也。

(今昔物語集一—十七 p.53)

③⑥ 弘高、少年の時、出家したりけるが、後に還俗したるなり。其罪をおそれ、みづから千體の不動尊を書て、供養しけるとなん。

(古今著聞集三八七 p.311)

③⑦ 「大臣は祿を重じて諫めず、小臣は罪に恐れて申さず」と云事なれば、をの／＼口をとち給へり。

(平家物語一 p.129)

③⑦は唯一の二格例だが、未実現事態と言え、ヲ/ニの別による差異は認められない。しかしこの例は、『本朝文粹』に「大臣は祿を重んじて諫めず、小臣は罪を畏れて言はず。下の情は上に通ぜず」(慶滋保胤)とあるのによつたものとされ、ヲ/ニが揺れていることが分かる。節をなさない名詞の場合、節をなす例ほど確定/非確定が明示的でないことから解釈に幅が生じ、格表示に揺れがあるものとも考えられる。ただ、ヲ格例には「不孝の罪」等、名詞の内容を表すような修飾語を伴う例が見られ、感情の内実を表しやすく説明的である。このことは未実現事態を説明的に明示する名詞節をとる例と通じる。

天皇や将軍を指す語に関して、ヲ格に「御前」(曾我物語)と「一人」(平家物語)

の計2例、二格に「公」(今昔物語)の1例が見られるが、先述のような差は見いだせない。政の頂点に立つ人物は実際の人物でありながら、眼前にしていたとしてもその存在は遠いものであっただろう。これは意味的に確定性の有無の境界例と見なすことができ、そのためヲ/二格の両者が現れると考えられる。

以上のように同じ名詞をとる例では、節をなす場合と同様の差が現れる「威・威勢」「気色」から、そのような差異が見出されない「罪」や天皇・将軍を指す語まで様相に差があるものの、二格例では確定性が高いこと、またヲ格例は確定性が総じて低い傾向がわかる。

5. 近世以降の様相

本節では主に近世以降の様相を示し、現代語までの変遷を概観する。近世以降の調査結果を【表3】に示し、参考として、和漢混交文以外の中世の資料の調査結果も幾つか示した。中世の抄物では他資料に比して、ヒト名詞が多いが、未実現事態を表す節が現れる点、確定性の低い名詞が現れる点は和漢混交文のヲ格例と共通しており、一見具体的なヒト名詞の場合も、その人物が「何かすること」に対する感情と解釈できる点が、二格例と異なる。

『コンテムツス・ムン

【表3】中世以降のオソル・オソレル

ヂ』は用例の多くがヲ格例だが、翻訳書であり、別に検討が必要である。^(注15)

近世になると、オソルの用例自体が減少する。中世以前は口語要素が強い作品にも現れていたが、近世には口

	ヲ	対象有	ニ	ト	左記以外	総数	ヲ格例割合	左記以外割合
史記抄	4	1	1	3	10	19	21.1%	52.6%
蒙求抄	4	0	2	3	7	16	25.0%	43.8%
天草版平家物語	2	0	3	0	8	13	15.4%	61.5%
コンテムツス・ムンヂ	24	0	0	0	0	36	66.7%	0.0%
きのふはけふの物語	0	0	0	0	1	1	0.0%	100.0%
醒睡笑	2	0	5	2	6	15	13.3%	40.0%
近松浄瑠璃	0	0	0	0	6	6	0.0%	100.0%
西鶴作品	4	2	3	0	11	20	20.0%	55.0%
浮世風呂	1	0	2	0	6	9	11.1%	66.7%
春色梅児誉美	1	0	1	1	0	3	33.3%	0.0%
椿説弓張月	28	5	20	0	39	94	29.8%	41.5%
近代女性雑誌コーパス	51	1	11	2	40	105	48.6%	38.1%
近代小説	53	5	1	0	23	82	64.6%	28.0%
新潮の100冊	486	17	9	50	166	728	66.8%	22.8%

語要素の強い作品には現れないようで、現代語の様相と共通する。また調査資料内においてではあるが、一時二格名詞の種類が少なくなる。読本で、古い表現も残す『椿説弓張月』、文語が多い近代女性雑誌コーパスでは、二格例が比較的多く、名詞も多様性があるが、近代小説では二格例が少ない一方で、7割以上の作品でヲ格例

が高い割合を示し、ヲ格が高い割合を示す傾向のまま現代語オソレルの様相に至る。ヲ/二格に大きな変化があったのは明治以降と言える。

5.1. 近世の様相

近世前期は中世の用例と同様、二格例では確定性の高い名詞が共起する。次の例はいずれも眼前の事態や、経験したデキゴトによる。また、数少ない二格名詞に「勢」や「威」が現れていることは注目すべきだろう。このような例は二格が定型的に用いられている可能性がある。

- ③⑧ 同三月廿九日山中の城を攻落されたれば其勢に恐れ箱根足柄の城をあけのきけるに 山中を攻ればあくる箱根山にくるも早き足柄のてき

(醒醉笑一落書 p.21)

- ③⑨ 女郎の子細をしりすぎて後にはやりくりを見とがめ、大夫も是にをそれ客もきのどくさに(略) 【是=女郎の行為】(好色一代女)

近世後期の『椿説弓張月』では二格の用例数も名詞の種類も多く、この資料においては前代と大きくは異ならない。ここでは古い表現も残す読本という資料の性質によるものと考えておく。そのほかの資料では、ヲ格例にも確定性の高い名詞を伴う例が数例見られるものの、二格例と同様に傾向は変わらない。^(H17)

5.2. 近現代の様相

近現代においてもヲ格は確定性の低い事態と共起し、特にヲ格名詞が節をなす場合に顕著である。しかし前代と異なる点も見られる。近代において前代と大きく異なる点は、ヲ格の割合の高さである。近世以前はヲ格例の割合が高いのは限られた資料のみであったが、近代女性雑誌コーパス、近代小説では全体の5割前後を占める。^(注15参照) 現代でもヲ格の割合が高くなっており、変化傾向として認められる。

また節をなす割合が、それまでは多くて3割に満たない程度だったのが、現代語では約4割に増加している。ヲ格例全体の割合が増加した中で、補文節をとる役割を保持し、さらに補文節以外の名詞節もとるようになっており、名詞節全体を項名詞として組み入れる構造が増大したと言える。ヲ格例で節をなす例のほとんどが確定性の低い未実現事態を表すことに変わりない点、ヲ格例が増加している点からも、感情を抱くこと自体を表すのを中核的な役割としたオソルが、感情の向けられる先

を取り込み、説明的に描写することを基本とするようになったことが伺える。このことは即時的でない感情をより表しやすくなったとも言え、益岡・田窪(1987)による、現代語においてヲ格のみをとる感情動詞は持続的感情だとの指摘につながると考えられる。

また明治期にはヲ格例で節をなす場合にも形容詞+ノ節の例(40)が見られ、既実現事態への進出が認められる。(40)の「その悪感化の著しいの」は前文脈から「ひどく悪い方向で感化されること」と解釈でき、未実現事態と言えそうだが、形式は形容詞の形をとっており、悪感化され始めていると解釈できる点で、既実現事態とも言える。

- (40) 本間の細君の放縦奢侈迄も見習ひはせぬかと、夫は内心心配を始めた。と云ふのは、その本間の細君と云ふのが、自分の妻の芳子よりは、ずっと下等な無智な女で、芳子等よりは、ずっと大膽な圖々しい物があるのらしいので、その悪感化の著しいのを恐れたのであつた。

(仲木貞一1925「細君同志」『婦人倶楽部』)

形容詞+ノの形式が出現したことは、ヲ格が節の場合も比較的確定性の高い事態に進出したことを示すと考えられる。これはヲ格の機能の拡大と言え、オソレル全体の中でヲ格例が増加しているのもこのことによると考えられる。この機能はニ格例やヲ/ニを伴わない例において果たされていた機能と交替したものの可能性があるが、意味的な側面を含めて変化を追う必要があり、詳細な検討は機会を改めたい。現代語において状態の例がノ節(41)、コト節合わせて5例、夕形が用いられる例がノ節に1例(42)ある。(42)は話し手自身が見られたか否かが分からない状態での発話であり、「見られたかもしれないこと」のため、確定性の高い既実現事態とは言えないだろう。そのほかは(43)のように未実現事態を表す。

- (41) 老婆が彼と二人きりなのを恐れるのではないかと危ぶみ、同時に自分の様子が老婆を安心させるとは思えなかつたので、ラスコーリニコフは老婆がまたドアに手をかけて、ひっぱった。(ドストエフスキー『罪と罰』)
- (42) 私の側には何も疚しいことはなかつたのに、むしろ私は、私が見られたのを惧れていた。(三島由紀夫『金閣寺』)
- (43) 女たちは私たちの労働部隊の先導者に男たちの姿が見つかることを恐れ、私たちが街道のかなたにあらわれるのを見るや否や町の裏門から男たちを

退避させた。

(開高健『パニック・裸の王様』)

このように節をなすヲ格名詞例において、既実現事態への進出の萌芽が認められるものの、中世の様相と同様に、確定性の低い事態をとる。節以外の場合は未実現事態とも、既実現事態を表す名詞や確定性の高いヒト・モノとも共起する。

現代語二格の9例は、中世と同様に、確定性が高いもの(44)がほぼ占め、補文節をなす例は解説文中にはあるが1例あり、これも既実現事態である(45)。

(44) 歩兵団式の四角な隊形は、守備兵からの銃火にも怖れる気配はなく、倒れた兵は、予定のことであるかのごとくわきに押しやられるだけで、隊形はまったく崩れない。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)

(45) しかし、延年が誅されたのに恐れて匈奴の地にのがれ、投降した。

(中島敦『李陵・山月記』解説)

(46) そのくせ自分でも予見できる苦痛に恐れ戦いていたのである。

(モーム『月と六ペンス』)

二格例は、中世では確定性が高く、眼前性、現場性が含意されたが、現代に至ると確定性が低いと解釈される名詞を伴うこともあり(46)、ヲ/ニの差異が明確でない。両者の接近したように見える例が増えたことで、各特徴がより見えにくくなっていると考えられる。

6. おわりに

本稿では中世和漢混交文において、オソルのヲ/ニ格名詞の把握における確定性が、格形式と関係することを中心に示した。考察の結果、以下の三点が認められた。

- ① 項名詞が節をなす場合、ヲ格では補文節で未実現の事態を表す。二格では関係節でモノ・ヒトを表す。
- ② ①以外の名詞では、ヲ格名詞は未実現の事態や未だ直面していないモノであるか、個別事象の描写ではない例がほぼ占める。二格では名詞が眼前のモノであるか、個別事象の描写例が大半である。
- ③ ①②のいずれも二格例において対象把握の確定性が高いことを示す。またヲ格例では確定性が低い傾向にあることを示す。

ヲ/ニ格で重なる名詞には格形式による違いが見られない語も存在するものの、上記三点のようにヲ/ニの差が認められる。感情が向けられる先は感情主にとって

確かなはずであるが、オソルは感情を抱く時点における未実現事態でも項名詞としてとることができ、ヲ/ニ格名詞の確からしさには差がある。ニ格例では感情を抱く時点において対象が存在するものとし、確定性が高い。一方、感情を抱く時点で実現していない事態は確定性が低いと言え、これが、ヲ格例では特に節の場合に顕著に表れる。このように構文の異なりがヲ/ニ格と相関することが明らかとなった。

5節で述べたように、ヲ格名詞が節をなす場合に、確定性の高い事態を表す例が得られるのは現代に至ってからである。しかし現代語でも節の場合は、ほぼ未実現事態が占め、それ以外の名詞も未実現を含意するものが多い。一方で現代語でのヲ格は、中世ではニ格に見られたような確定性の高い名詞もとることができ、カバーする領域が比較的広がっている。中世にはヲ/ニ格例が拮抗している資料が見られ、一文内に対象が明示されない例が多い一方で、近代以降、全体的傾向としてヲ格を伴う例の割合が高くなった。つまり、オソレルはよりヲ格との結びつきが強くなったと言える。中世から現代までの変遷を記述するには資料に偏りがあり、年代の間隔が埋められていないが、およその傾向は把握できたと考える。^(注18)

本稿では、なぜヲ/ニの対立が確定性に関係するのかという根本的な問題を解決できていない。しかし、ヲ格表示によって名詞を項として明示することで、未実現事態に代表されるような、即時的な感情を表す際のオソルの対象として捉えにくいものも対象とし得たのではないかと推測する。高山道代(2005)において古代語のヲ格表示は、働きかけの成立に抵抗のある対象の表示を担い、心理動詞に多いとする。古代語の共時態において、ヲ格が「対格らしくない名詞を対格の構造に組み込む」(p.190)機能を有するとの指摘は、古代語に関しての論考であるものの、中世共時態のオソルにおける本稿の見通しと軌を一にする。この問題を解決するためにも、今後は、項名詞を伴わない例、引用のト共起例も含め、考察したい。また考察対象をオソルに限ったため、この考察がオソル同様、未実現の事態をとる「焦る」などのタイプの感情動詞、またはその他の「喜ぶ」「怒る」などと如何に通じるのかを今後検討する必要がある。ほかに両格をとり得る動詞の検討を積み重ねることで、明らかにしたい。

注

- (1) 宮地(1979)ではいくつかの感情動詞について語義の変遷を中心に考察し、そのうち「好く」「恋ふ」に関しては格形式の変遷との関係から考察している。
- (2) 築島(1969)などで、和文にはオソルがほとんど用いられず、訓読文でよく用いられるという指摘がなされている。
- (3) 説話、軍記物を中心に調査した。
- (4) 用例は日本古典文学大系(底本:大福光寺蔵本(鎌倉中期頃))によった。古本系三条西家本(室町中期)では「人ニオソル、」となっており揺れている。ここではヲ格例として扱うが、検討を要する。
- (5) 確例のみを扱い、オツとの区別ができない例は除いた。またオソ(ル)ラク(ハ)も除外する。オソレナガラは副詞用法が見られるが、完全に副詞として用いられているとは言えない例も見られるため、調査対象とした。またト例は引用のトであり(1例のみ「～として」の意を表わすトテ)、様態を表すトは得られなかった。ニとトが共起する例が『太平記』に1例見られる(用例15)以外には、ヲ/ニとの共起例は得られなかった。
- (6) 一般論を述べる際によく用いられるのが「オソルベキ～」だが、現代語では高程度を表す用法(ex.恐るべき速さ)が多く見られるのに対し、中世和漢混交文では確実に高程度のみを表す用法はほとんど見られないようである。
- (7) 今回は考察の範囲外とした『三宝絵』(984年、東寺観智院本1273年書写)には、次のようにムが句末を構成する準体節の例が見られる。

二人ノ兄ミノ妨ケムヲ恐リテ先立行キ給ヒネ(上卷十一 p.54)

- (8) 「設想」は山田(1908)による。尾上(2001)では、述定形式「未然形+ム」に固有の述べ方は「非現実の事態を(承認せずただ)仮構する」という述べ方」(p.457)であるとされる。また高山善行(2005)はムの機能は非現実標示であるとす。ただし、高山(2005)は連体用法に限った考察であり、コトなど形式名詞は準体用法の問題として別にする必要があるとされている。
- (9) 名詞+ヲ81例のうち、36例がAに分類されることを示す。以下同じ。
- (10) この例の場合、人が逃げ去る前に軍を眼前にしている可能性が高い。
- (11) 【威・威勢】ヲ：王威、雷霆の威、ニ：威、佛ノ威、頼朝が威勢、霊威、朝威、皇威、その威、武威、趙高が威勢／【気色】ヲ：上ノ御気色、ニ：此男ノ気色、入道殿の御気色／【罪】4.3で列挙した罪障や悪業と意味が類似するが、別に扱う。ヲ：罪、不孝の罪、余桃の罪、破戒の罪、ニ：罪
- (12) 天皇や將軍を指す語として一括して扱う。
- (13) ここでは便宜的に「事」を伴う用例も代名詞として一括して扱う。
- (14) 日本古典文学大系『平家物語 上』(岩波書店)注 p.128。あるいは訓読文であることが関係するか。
- (15) 『ぎやどべかどる』でもヲ格例が過半数を占める。キリシタン資料、抄物を含めて調査

した結果、ヲ格例が過半数を占めるのは、総用例数が10例以上ある資料では『コンテムツス・ムンヂ』『ぎやどべかどる』のみである。

- (16) 『明治の文豪』『CD-ROM 版新潮の100冊』所収の次の15資料である。明治以降、大正15年(1926)以前に書かれた小説を対象とした。二葉亭四迷『浮雲』、泉鏡花『婦系図』『歌行燈・高野聖』、田山花袋『蒲団』『田舎教師』、夏目漱石『こころ』、森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』、芥川龍之介『羅生門・鼻』、有島武郎『小さき者へ・生まれ出づる悩み』、梶井基次郎『檸檬』、志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』、島崎藤村『破戒』、谷崎純一郎『痴人の愛』、樋口一葉『にごりえ・たけくらべ』、武者小路実篤『友情』
- (17) 近世では(今回は調査対象としていない洒落本・黄表紙本でも)、「おそろおそろ」を除くと、オソレル単独例には、程度を表したり、「酷い」様を表したりする用法が多く見られ、このことも大きな異なりであるが、今後の検討課題としたい。恐怖の感情を表す例では、やはりニ格名詞は確定性が高く、ヲ格名詞は確定性が低いと解釈できる。
- (18) 感情形容詞オソロシイまたはコワイとの関係も考慮しなければならないが、この点の説明は今後の課題とする。

参考文献

- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』 岩波書店
- 岡崎正継 (1973) 「『御導師遅く参りければ』の解釈をめぐって」『今泉博士古稀記念国語学論叢』 桜楓社
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』 くろしお出版
- 工藤力男 (1978) 「格助詞と動詞との相関についての通時的考察」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』 26、岐阜大学
- 佐藤響子 (1997) 「ニ格名詞句をとる心理動詞」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』 48 (2・3)、横浜市立大学学術研究会
- 信太知子 (1981) 「『～をそむく』から『～にそむく』へ—動作の対象を示す格表示の交替—」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究二』 和泉書院
- 高山道代 (2005) 「古代日本語のヲ格があらわす対格表示の機能について—ハダカ格との対照から—」『国文学解釈と鑑賞』 70(7)、至文堂
- 高山善行 (2005) 「助動詞「む」の連体用法について」『日本語の研究』 1(4)、日本語学会
- 田中牧郎 (1990) 「『おそろ』と『おづ』—平安・鎌倉時代を中心に—」『国語学研究』 30、東北大学文学部国語学研究会
- (1995a) 「今昔物語のオソロシとオソルについて(一)—感情表現における形容詞と動詞—」『学苑』 661、昭和女子大学近代文化研究所
- (1995b) 「今昔物語のオソロシとオソルについて(二)—感情表現における形容詞と動詞—」『学苑』 662、昭和女子大学近代文化研究所
- 築島 裕 (1969) 『平安時代語新論』 東京大学出版会

- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』くろしお出版
 宮地敦子 (1979) 『身心語彙の史的 연구』明治書院
 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館
 BANDO, Michiko (1996) "Semantic Properties of *-Ni* NP and *-O* NP of Japanese Psych-verbs" 『大阪大学言語文化学』 5、大阪大学言語文化学会
 J.ロドリゲス (1604-1608) 『日本大文典』土井忠生訳 (1955) 三省堂

調査資料・用例出典

日本古典文学大系 (岩波書店): 『方丈記』『大鏡』『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『平家物語』『保元物語・平治物語』『曾我物語』『義経記』『浮世風呂』『春色梅兒誉美』『椿説弓張月』/
 新日本古典文学大系(岩波書店): 『今昔物語集』/日本古典文学全集 (小学館): 『今昔物語④』 以上については各種索引を用いた。

その他及び索引: 小泉弘・高橋伸幸(1980) 『諸本対照三寶繪集成』笠間書院/馬淵和夫監修 (1985) 『三宝絵詞自立語索引』笠間書院/築島裕監修・月本直子・月本雅幸編(1993) 『宮内庁書陵部蔵本寶物集総索引』汲古書院/深井一郎編(1980) 『慶長十年古活字本沙石集総索引 索引篇・影印篇』勉誠社/江口正弘(1979) 『海道記の研究 本文篇研究篇』笠間書院/江口正弘(1979) 『海道記: 語彙及び漢字索引』笠間書院/泉基博編(1982) 『十訓抄本文と索引』笠間書院/山田巖・木村晟編(1986) 『歎異抄本文と索引』新典社/西端幸雄・志甫由紀恵編 (1997) 『土井本太平記本文及び語彙索引』勉誠社/岡見正雄・大塚光信編(1971) 『抄物資料集成 史記抄』『抄物資料集成 毛詩抄・蒙求抄』清文堂/江口正弘(1986) 『天草版平家物語 対照本文及び総索引 索引篇・本文篇』明治書院/近藤政美(1980) 『ローマ字本 コンテムツス・ムンヂ総索引』勉誠社/豊島正之(1987) 『キリシタン版ぎやどべかどる本文・索引』清文堂/北原保雄編(1973) 『きのふはけふの物語研究及び総索引』笠間書院/岩淵匡他編『醒睡笑静嘉堂文庫蔵』索引編(1998) 本文編[改訂版] (2000) 笠間書院/近世文学総索引編纂委員会編(1986) 『近世文学総索引 近松門左衛門第1・3・5巻』同編(1990) 『近世文学総索引 井原西鶴第5~10巻』教育社/『近代女性雑誌コーパス』(国立国語研究所)/『CD-ROM 版新潮文庫 明治の文豪』(1997) 新潮社/『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』(1995) 新潮社

本稿は、第13回日本語文法学会 (2012年10月28日 於名古屋大学) における口頭発表を基に加筆・修正を行ったものである。

(まつの・よしみ/名古屋大学大学院博士課程後期)